

## カウアイ・コミュニティ・カレッジとの交流プログラム実施報告

大西真由美<sup>1</sup>・大石 和代<sup>1</sup>・入山 茂美<sup>2</sup>・黒田 裕美<sup>1</sup>・横尾 誠一<sup>1</sup>

保健学研究 23(1): 37-41, 2011

(2010年9月28日受付)  
(2010年12月2日受理)

## はじめに

長崎大学医学部保健学科とカウアイ・コミュニティ・カレッジ（以下、KCC）との交流は、2007年6月にKCC教員3名を、長崎大学において受入たことに端を発している<sup>1)</sup>。その後、2008年10月に、長崎大学医学部保健学科（以下、保健学科）から、教員2名がKCCを訪問し、今後の交流事業の進め方について協議した<sup>2)</sup>。KCC側としては、沖縄県立看護大学と既に約10年間の交流実績があり、これを機会に長崎大学と沖縄県立看護大学を交互に訪問したい旨の申し入れがあった。長崎大学保健学科としても、国際交流ならびに国際看護学実習の充実を図る目的で、KCCとの交流事業の実施可能性について検討することとした。今回、2010年5月24日-30日の7日間、KCC看護教員5名ならびに看護学生2名を、保健学科において受け入れたので報告する。

## 1. 受入準備

## 1-1) プロジェクト・チームの形成

2009年11月に、KCCオノ教授より、2010年3月に長崎大学を訪問したい旨の依頼があった。しかしながら、本学としては、先方が希望される時期に行事が計画されていたこともあり、2010年5月に受入ることとした。受入にあたっては、2010年3月下旬に、保健学科看護学専攻が中心となり、プロジェクト・チームを作り、準備を進めた。プロジェクト・チームは、国際看護学実習の科目責任者である大西教授が責任者となり、看護学専攻の各講座から1名ずつチーム・メンバーを選出し、計5名で構成された。各メンバーは、以下に述べる受入準備から実際の受入期間中の対応、事後処理に至るまで、それぞれ役割分担し、作業を進めた。プロジェクト・ミーティングは、3月26日、4月15日、5月10日の計3回、開催した。加えて、必要に応じて、適宜、電子メールにより、進捗を報告し合った。

## 1-2) Basic agreement, Affiliation agreementの準備、署名

沖縄県立看護大学とKCCとの交流実績に倣い、長崎大学医学部保健学科とKCCの間でBasic agreementと

Affiliation agreementを署名し、取り交わした。Affiliation agreementは、長崎大学においては国際交流覚書の「付属書」に位置づけられる文書であり、内容は、プログラム内容、経費、双方の責任等について、詳細に記載したものである。協定書の締結にあたり、大学間交流協定ではない場合（部局間協定等）、大学全体のコンセンサスを得る必要はないが、文書作成にあたっては、表記方法等について本学国際交流課ならびに保健学科教育研究委員会の協力を得た。Agreementの内容については、電子メールにて、KCCのオノ教授と大西教授が中心となり、2010年3月初旬から検討を始めた。

## 1-3) プログラム

交流プログラム内容については、KCC側から、2008年3月の教員・学生受入時の内容に準じた形を希望するとのことであったため、表1の通り計画した。オノ教授より、前回訪問時に恵の丘原爆ホームを訪れたことが印象的であり、特に、被爆者体験をうかがうことが可能であれば、是非アレンジしてほしい旨、依頼があり、受入施設側と調整した。各受入施設との調整は4月初旬から行なった。

保健学科学生から、ウェルカム・パーティ、5月28日（金）-30日（日）の2泊3日のホームステイ受入、5月29日（土）の自由行動時間のホストを募り、看護学専攻2年生-4年生10人が、何らかの形で本プログラムに関った。ホスト学生の募集は、年度初めの学年別オリエンテーション、メーリングリスト、学内掲示によって行なった。ホスト学生には、4月下旬から5月中旬の間に、3回の事前学習の機会を設け、交流プログラム内容の説明と共に、講義と資料による自己学習を行なった。内容は、「米国の保健医療制度」、「米国の看護教育制度」、「大洋州の島嶼保健」である。また、自由行動時間にKCC学生を案内するにあたり、文化・歴史等に関する必要な情報収集を行ない、1冊のファイルにまとめてもらった。ホスト学生には、5000円/人の謝金と電車の1日乗車券を提供した。尚、H21年度以降に入学した看護学専攻の学生は、本プログラムに参加し、課題提出することにより、国際看護学実習Iとして単位取得可能であ

1 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻

2 名古屋大学医学部保健学科看護学専攻

活動報告

表1. プログラム

	24-May Mon	25-May Tue	26-May Wed	27-May Thu	28-May Fri	29-May Sat	30-May Sun
9:00		9:30 ホテル出発	9:00 ホテル出発	9:00 ホテル出発	9:30 ホテル出発	ホスト学生の案内による市内見学	
10:00		10:00 表敬あいさつ (会議室)	9:30-12:00 平和公園、爆心地、原爆後遺障害医療研究施設資料展示室視察	10:00-11:30 大村市内文化視察	10:00-12:00 恵の丘原爆ホーム別館訪問		
11:00		プログラム説明、長崎市&長崎大学紹介 (大学院生室2)					11:00-13:00 フェアウェル・ランチ (ホテル・クオーレ)
12:00		ウェルカムランチ (会議室)	昼食 (医学部生協)	昼食	昼食 (パークサイドホテル)		
13:00		日本の看護教育制度、保健学科紹介 (大学院生室2)		13:00-16:00 大村市役所 (転倒予防教室、乳幼児健診等、見学)			13:00 長崎駅バスターミナル空港バスにて長崎空港へ
14:00		14:30-16:00 助産学講義参加	熱帯医学研究所ミュージアム		14:00-16:00 長崎大学病院見学		
15:00			医学部図書館資料室				15:15 長崎空港より帰途に
16:00		保健学科内案内	原研資料展示室		16:15 ホスト学生とミーティング (教員は、「お抹茶体験」:会議室)		
17:00		カウアイ・コミュニティ・カレッジ紹介 (大学院生室2)			17:00-18:30 アカデミック・ミーティング(教員のみ) (大学院生室2)		
18:00		18:30-20:30 エルカム・パーティ (ラウンジ「ボンベ」)					
19:00					19:00 懇親会 (教員のみ)		
備考	長崎到着 21:00 宿泊:クオーレ	タクシー	タクシー	バス借上	タクシー	教員は自由行動	

るため、1名が履修登録を行なった。

ウェルカム・パックとして、名札、交流プログラムのスケジュール、名簿、長崎市内地図ならびに市内見学用資料等を準備した。地図ならびに英語の市内見学資料については、社団法人長崎国際観光コンベンション協会より、無料で交付を受けた。別途、日本の保健医療制度、日本の看護制度・看護教育、保健学科紹介、看護学専攻紹介に関する英語資料ならびに日本看護協会のNursing in Japan, Midwifery in Japanを準備した。

今回は、通訳を依頼せず、日本語を話すことができるオノ教授の協力を得て、お互いに英語または日本語でコミュニケーションを図ることとした。

## 2. 交流の実際

### 2-1) 第1日目

KCC側一行は、長崎空港から市内への移動は公共の空港バスを利用し、5月24日の22:00過ぎに長崎駅前バスターミナルに到着された。プロジェクト・チーム責任者が、長崎駅前バスターミナルでKCC側一行を出迎えた。ホテルまで案内し、翌日の予定について簡単な打合せを

行なった。

### 2-2) 第2日目

9:30にホテルに迎えに行き、保健学科に到着後、学科長、看護学専攻主任に表敬訪問した。その際、Basic agreement, Affiliation agreementに、保健学科側は松坂学科長、KCC側は学長代理としてオノ教授が署名を行なった。

KCCオノ教授は何度も日本を訪問しておられるため、日本の諸事情についても詳しいが、その他の参加者は初めての日本訪問であり、日本の保健医療制度、看護教育制度に関して、詳細な質問もあった。事前に準備した資料では不足事項があったため、健康保険等に関する英文資料等を後ほど提供した。また、KCC参加者が助産学の講義(沐浴)に参加できるように調整し、実際の授業を体験していただく機会となった。

オノ教授から、KCCの概要、教育内容、学生生活について紹介していただいた。KCCでは、2年間の看護教育により、修了時には準学士およびRegistered Nurse(看護師)試験受験資格が得られる。その後、ハワイ大

学看護学部との連携による学士コース（2年間）を、遠隔教育によって受講可能なシステムになっており、修了時には看護学士を取得できる。

ウェルカム・パーティでは、ホスト学生らが、琴演奏と習字、剣道のデモンストレーションといった文化紹介およびダンス等、アトラクションを準備しており、KCC参加者も興味深く、また楽しそうな様子が見えた。

#### 2-3) 第3日目

ホテルからタクシーにて、直接、原爆公園を訪問した。事前にプロジェクト・チームから、財団法人長崎平和推進協会に、英語によるガイドを依頼した。同協会を通してガイドを依頼する場合は、1,000円（交通費実費程度）/回で案内していただける。平和公園から爆心地、原爆資料館まで約3時間、丁寧に説明していただいた。また、原爆公園と爆心地において献花を行なった。

熱帯医学研究所ミュージアム（英語）、医学部図書館資料室（日本語）、原爆後遺障害医療研究施設資料展示室（英語）を、それぞれの施設担当者から説明・案内をしていただいた。

#### 2-4) 第4日目

事前にプロジェクト・チームがバスの借上げをアレンジし、KCC側参加者ならびにプロジェクト・チーム・メンバーと一緒に、ホテルから大村市へ移動した。午前中は、事前にプロジェクト・チームがアレンジした地元のボランティアの方に、大村市の歴史について解説していただきながら、大村公園を散策した。

午後は、大村市に依頼し、転倒予防教室、3歳児健診を見学させていただいた。

#### 2-5) 第5日目

恵の丘原爆ホームでは、被爆者の方から体験談をうかがうことができ、KCC参加者も大変感銘を受けていらした。

長崎大学病院見学では、看護師の勤務体制、人員配置、離職率等に関する質問が出された。

夕方、KCC学生は、2泊3日のホームステイのために受入学生と共に自由行動とした。

教員は、保健学科側からは12人、KCC側からは5人の教員が参加し、アカデミック・ミーティングを行なった。KCCと共同研究を行なっている山口助教から「Meaning of quality of life for 6 terminally ill patients in Japan」に関する研究報告があった。日本とカウアイにおける終末期ケアおよび患者・家族の終末期ケアに対する意識に関する比較について意見交換が行われた。その後、今後の共同研究の可能性を探るためのディスカッションを行なった。保健学科教員からは、関心を持っているテーマとして、子どもの精神保健、自閉症児のケ

ア、障害を持つ子どもの兄弟姉妹へのケア等の内容が提示された。それに対して、KCC側からは、カウアイにおいて共同で調査研究可能なフィールドまたは施設を紹介することが可能であるとのことであった。今回は、具体的な共同研究テーマに関して計画するには至らなかったが、双方で必要に応じて協力し合うことが確認された。

#### 2-6) 第6日目

KCC学生は、終日、ホスト学生らの案内により、着物着付け体験、温泉等、日本文化を満喫したようであった。

KCC教員らは、5人全員で雲仙へ1泊旅行に出かけた。事前にKCC側から、宿泊予約と交通手段の確認の依頼を受けたため受入プロジェクト・チームで対応したが、当日はオノ教授が引率されたので、保健学科からの引率は必要なかった。

#### 2-7) 第7日目

フェアウェル・パーティでは、KCC参加者およびホスト学生にプログラム参加修了書が手渡された。一人ずつ感想を述べたが、中にはKCC側もホスト側も涙で言葉にならない学生がいた。

長崎駅前バスターミナルで、フェアウェル・パーティ参加者全員で皆さんをお見送りした。

### 3. 交流後の対応（ホスト学生による評価ならびに写真パネル作成）

ホスト学生ならびに市内見学に参加した学生による自記式無記名質問紙による評価を実施した。参加者10人に配布し、5人から回答が得られた。参加する前に「積極的に参加したい」と考えていた学生は4人、「どちらかと言えば参加したい」と考えていた学生は1人であったが、参加後は全員が「(参加して)とてもよかった」と回答していた。学生からの自由記載による意見・感想を表2に示す。

交流プログラム中の写真を使い、ホスト学生有志により、交流プログラムを紹介する写真パネルならびにパワーポイントによる紹介プレゼンテーション資料を作成してもらった。これらは、次回、同様の取組みを行なう際の保健学科学生へのオリエンテーション資料、ならびにオープンキャンパス等の機会に保健学科における国際交流および国際看護学実習について紹介するための資料として活用することを目的としている。

### 4. 交流経費

交流経費に関しては、KCC側参加者から、プログラム実費として一人当たり35,000円を徴収し、移動のための車両借上げ、食事、諸雑費等の支出にあてた。宿泊予約は長崎大学側で行なったが、宿泊費は、プログラム参加者が各自でホテル側に支払った。その他に、今回は教

表2. 交流プログラムに関するホスト学生の意見・感想

1. 交流プログラムに参加してよかったこと、有意義だったこと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ カウアイの学生と1日たっぷり交流できたことはよかった。</li> <li>・ 単語やジェスチャーで思っていることは伝わるとわかってよかった。次はもう少し積極的に話をしてみたい。</li> <li>・ 今まで関りの薄かった学生と短期間に色々なことをして仲良くなった。編入生とも関るチャンスになった。</li> <li>・ やり遂げた達成感があった。</li> <li>・ 貴重な経験ができた。英語が全然話せなくてもわかってもらえてよかった。楽しかった。</li> <li>・ アテンドでグラバー園へ行った時、マダムバタフライやブッチーニの曲の楽譜をモチーフとした噴水などについて、自分は何も知らなかったが、メンバーらがそれらについての知識と英語力で解説しているのを見て、自分をもっと努力しないとイケないと学習意欲につながった。</li> <li>・ 自分達が時間を共にして準備をしたことで一体感が生まれた。準備もいつになく熱くなった。</li> </ul>
2. 交流プログラムに参加して困ったこと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 英語が不自由で、ヒアリングもできず、もてなしたいという気持ちはあるのに、それを自分の言葉でうまく伝えられなかったこと。もっと英語ができれば、もっと楽しかったはずなのに。</li> <li>・ アテンドの日以外で行くことが既に決まっている場所があれば、事前に知りたかった。</li> <li>・ アテンド費用が少なかった。</li> </ul>
3. その他
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ (ホームステイの)ホストの学生の自宅に遊び行き、話ができてよかった。</li> <li>・ 参加して本当によかった。</li> <li>・ 今回は(カウアイからの)学生が2人だけだったので、もう少し多くの学生が参加してくれたらよかった。</li> <li>・ 楽しかった。達成感がある。</li> <li>・ カウアイの学生さん達が「最初、日本の学生がどんな人達なのか不安だった」という言葉を聞き、最初のウェルカム・パーティでしっかり芸をすることによって、「英語はあまりしゃべれないけれどももてなしたい気持ちは凄くある」ことを伝えることが大事だと思った。それによって、あまり一緒に過ごす時間がなかったカウアイの先生方もうちとけられた。</li> </ul>

員からの寄付は募らず、教育後援会から20万円、看護学助成金から10万円の助成に加え、前回受入時の繰越金を、ウェルカム・パーティ、懇親会等の支出にあてた。尚、今回から、同様の交流プログラム等により残金が生じた場合には、「保健学科国際交流基金」としてプールすることとなった。

従来、同様の交流プログラムに際しては、財団法人輔仁会(以下、輔仁会)からの助成を得ており、3月初旬に助成申請していたが、5月中旬に、今年度は輔仁会の事業縮小に伴い、助成金を得ることができないとの回答があった。輔仁会からは、今後、再度事業を拡大する可能性もあるので、助成の必要がある時にはその都度申請してもらいたい、とのことであった。

## 5. プロジェクト・チーム総括会議による今後の課題

### 5-1) 受入時期および資金

受入時期については、今回は、KCC側の当初希望の通りに3月に実施することができなかったが、5月下旬の開催の方が保健学科としては卒業式等の行事と重ならないため、対応しやすかった。一方、学生は、平日は授業があるため、一緒に交流する機会が限られてしまい、残念であった。

資金については、今回は参加者から実費徴収したため、保健学科教員寄付に頼らずに対応することができた。

### 5-2) ホスト学生への対応

事前オリエンテーションで「ボランティア参加なので、自分達にできること以上のことをする必要はない」ことを伝えてあったにもかかわらず、ホスト学生からは、謝金(5,000円/人)が少ないという感想があった。今回

交流プログラムに参加した学生達は、相手をもてなそうという気持ちが強く、がんばりすぎる傾向がある半面、打算的な側面もうかがえた。

事前に表2と同様の交流プログラム全体のスケジュールを伝えてあったにもかかわらず、ホスト学生から「アテンドの日以外で行くことが既に決まっている場所があれば、事前に知りたかった」との意見があった。今後の課題として、KCC学生の希望や好みによって柔軟に対応することや何らかの事情で計画が予定通りに進まなくなった場合のホスト学生の対応能力や様々な可能性を想定して準備をする能力を強化することが必要である。

本交流プログラムが双方の異文化理解を深める機会となり、更に発展することを期待する。

## 謝辞

本交流プログラム実施にあたり、長崎大学研究国際部国際交流課、医学部保健学科教育研究委員会ならびに教職員の皆様にご支援ご協力いただき、心より感謝申し上げます。

## <文献>

- 1) 山口智美, 浦田秀子, 入山茂美, 井上晶代, 中尾優子, 佐々木規子, 野村亜由美, 田中悟郎, 鶴崎俊哉, 中島久良: ハワイ, カウアイ・コミュニティ・カレッジ教員・看護学生受入れ報告. 保健学研究, 21: 85-91, 2009.
- 2) 大石和代, 大西真由美: カウアイ・コミュニティ・カレッジとの学生交流プログラム実施可能性ならびに適正に係る視察・協議報告書. 平成20年度第7回看護学専攻会議資料, 2008.

## Exchange program between Kaua'i Community College and Nagasaki University

Mayumi ONISHI<sup>1</sup>, Kazuyo OISHI<sup>1</sup>, Shigemi IRIYAMA<sup>2</sup>, Hiromi KURODA<sup>1</sup>, Seiichi YOKOO<sup>1</sup>

1 Department of Health Sciences, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

2 Department of Nursing, Nagoya University of Health Sciences

Received 28 September 2010

Accepted 2 December 2010